

残(ザン)(<特集>文芸ゼミ創作作品集)

著者	萩原 茜
雑誌名	日本文学誌要
巻	64
ページ	120-121
発行年	2001-07-14
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020188

特集 文芸ゼミ創作作品集

・卒業生作品※(一)『残』

／萩原 茜(高橋ゼミ卒)

・卒業生作品※(二)『怪鳥ジロンド』

／萩原 茜()

・文芸コース ゼミ生作品(一)『モンスター』

／織田 高広(笠原ゼミ現三年生)

・文芸コース ゼミ生作品(二)『眼球の裏側』

／長谷川映子(高橋ゼミ現三年生)

※編集部注

本誌六四号の卒業論文特集に、ご推薦頂いた文芸コースの卒業論文(創作)は、このたび過渡的な試みとして、『そとほり通信』の紙面をかりて掲載することにいたしました。ご了承をお願いいたします。

残^{ザン}

萩原 茜

真夜中、いっぴきのこどもが走り出した。生まれ育った洞穴を駆け出して、あつというまにみえなくなった。恐れていたことが起こった、と母は思った。母はこどもを追いかけて走り出した。

こどもの目は白く濁っている。こどもの目は夜ものを見ることができない。たいていのこどもはだから夜を怖がるが、本当にとまどきそうでないのがいる。かれらはある晩突然、まるで闇に魅入られたかのように走り出す。そして二度と帰らない。母はそのことを知っていた。自分のこどもがそうになったらどうしようと恐れていた。

そういえば、と母は夜を駆けながら思った。自分はどうしてそのことを知っているのだろうか。誰にも教えられたことはない、と思った。母は思い出そうとしたが思い出せず、ただどこかでそんなものを見たような、聞いたことがあるような気がしていた。母はひどく不安だった。不安が母を走らせた。

母はこどもの匂いをたどっていた。こどもは確かに、その方向へ走っていた。なかなか追いつかないのを母は、おかしい、と思いはじめていた。そのこどもは弱いこどもで、いつもは、ほかのこどもたちによくついていくくらいだった。走らされているのだ、と思った。だが一体、何に走らされているのか

はわからなかった。辺りには、こどもの匂いしかなかった。

母はふと、自分はいつかもこのように夜中、走ったことがあるのではないかという気がした。何かを追いかけて、何かを探して闇を駆け抜けたことがあるのではないかという気がした。それは遠い、今そうして走っているからだだけが覚えている記憶だった。確かに自分は走った。息を切らして走れば走るほど、母の中でその思いは強くなっていった。

走り続けて母はついに、大きな川のほとりにたどり着いた。川の手前で、こどもの匂いは消えていた。母は迷った。あのこどもに、この川の流れをこえられるはずがない、と思った。母は川の側で二、三回、行ったり来たりして、それから弾みをつけて、一気に川を渡った。渡ってかき回ると、驚いたことにこどもの匂いがみつけれられた。母はそれを追った。確かに何かが起こっているのだとそういう気がした。不安が増して、母はいっそう早く自分を走らせた。例の記憶にも、どんどんちかづいていくような気がした。

こどもの匂いは山を上りはじめた。草ひとつ生えない岩山で、頂上までいくと、切り立った崖になっているはずだった。登りながら母は、増していく不安と例の記憶が、自分の中で結び付いていくのを感じた。その結び付きはまだ混沌として、一致したすえ何があらわされるのかわからない。母はただ、嫌な予感でいっぱいだった。

頂上が見えてくると、少し先にこどもの姿があるのがわかった。こどもは上を向いて、頂上を指してまっすぐ走っていた。母は少しほっとして、だが次の瞬間はっとした。これから何が

起こるのかわかった。

空からずっと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようとしていた。こどもがぐるったように走り出した。止められない、と母は思った。母は一声高く鳴いた。こどもは一瞬びくりとした。そのすきに母はがむしゃらに走り、こどもを追い抜いて崖の切っ先に立った。母とこどもの頭上には、真っ白い巨大な月が全景をあらわしていた。昔じぶんも、と母は思い出していた。光を求めて走ってきたのだ……。

母は走ってくるこどもをみつめた。こどもは全身よれよれになって、それでもいっしんに月をみつめていた。崖のことなど気にも止まらない様子だった。母はさっきよりもさらに、高い声で鳴いた。立ち止まったこどもを尻目に、母は崖から高く飛んだ。こどもをいかせないために、と彼女はつぶやいていた。彼女の母も、そうしてある崖から飛び下りたのだった。

こどもの敏感な鼻は、すぐに血の匂いをかぎつけた。かれはその場で二、三度回り、月をもう一度見上げてから、山をおりていった。

(終)

怪鳥ジロンド

萩原 茜

峰岸高雄の夢に落ちてから、ジロンドは身動きがとれなくなった。ジロンドは動物や植物の夢を渡り、その夢の中の最も美味な果実を食うことで生きている、真っ黒い大きな鳥だ。